

For those who died with unanswered questions in their hearts.

応えられぬ問いを胸に死んでいった人々に捧ぐ

はじめに

捕虜を知っていますか

一九五七年に公開された『戦場にかける橋』という映画を観たことがあるだろうか。

第二次世界大戦中の一九四三年、タイとビルマ（現ミャンマー）の国境付近にある捕虜収容所を舞台とした戦争映画である。捕まっているのは、当時、連合国とされた側の兵士たちであり、主にイギリス人であって、日本人ではない。映画では、捕虜となったイギリス軍兵士を必死に鉄道建設に動員しようとする日本人大佐と、鉄道を立派に建設し、英国軍人の名誉を表現しようとするイギリス人将校、橋を破壊しようとするアメリカ軍人と現地の人びとという四者の姿が描かれ、極限状態における人間の尊厳と名誉、戦争と帝国のあり様を表現した、戦争映画の代表作として知られている。

軽快な「ボギー大佐のマーチ」の口笛のテーマ曲を、運動会などで一度は耳にしたことがあるに違いない。

また、大島渚が監督し、坂本龍一、デヴィッド・ボウイ、ビートたけしが出演した、ジャワの捕虜収容所を舞台にした映画『戦場のメリークリスマス』は、どうだろう。この映画でも捕虜となっているのは、オランダ人やイギリス人である。この映画も、坂本龍一とデヴィッド・ボウイのほおずりのシーンや、ビートたけしの初期主演作品として、一九八三年の公開当時、非常な話題を呼んだ作品だ。ビートたけしの「メリークリスマス」、ミスター・ローレンス」というせりふや、坂本龍一のテーマ曲をテレビCMで聞いた記憶があるのではないだろうか。

ヴァンゲリスの手になる印象的な主題曲がよく知られる『炎のランナー』を記憶している人もいるだろう。この映画は陸上の短距離走に命をかけた男たちの葛藤と栄光を描いた作品であるが、主役の一人、実在のスコットランド人牧師が「日本軍の（民間人）収容所で死んだ」ことが映画の最後に記される。これもまた、「収容所もの」映画なのだ。捕虜収容所では、現実は何が起きたのだろうか。この三つの映画で描かれる「捕虜たち」は、今、どうしているのだろうか。映画の中の捕虜たちは、現実の世界では、日本とどう向き合っていたのだろうか。こうした元捕虜は、一般的にPOW (Prisoners of War) と呼ばれる。本書が取り上げる「連合軍捕虜問題」とは、戦中に日本軍に捕まっ

た元捕虜とその家族の、日本と日本人に対する憎悪、苦しみとトラウマ、そして戦後の日本への抗議などをさしている。

戦後、捕虜問題は連合国各国の中で様々な展開をしていたが、日本に伝わることは稀だった。一九九八年の天皇訪英や、二〇〇〇年の天皇訪蘭の際の抗議活動によって一時期、話題となったが、あちらの国の意識の激しさが日本に十分、伝わったとは思えない。また、元捕虜が日本政府や日本企業を訴えるアクションを起こした動向は多少注目されたようだが、アメリカで賠償の訴訟が上告棄却されたあとは、沈静化していった。

戦後和解とは何だったのか

日英、日蘭、日豪など、外交をめぐる状況の中で、必ず甦ってきながら、和解にいたらない未解決の問題が、戦後和解問題である。特に捕虜問題は、日本外交の一つのネックとなっている。「まだ日本は一度も〈シャザイ〉していない」という声が諸外国から聞こえてくる一方で、「そんなことはない。何度も日本は謝っている。むしろ、日本はいつまで謝ればいいのか」と苛立つ日本人も多い。

では、〈シャザイ〉をめぐる、そこにはどんな認識のずれが存在しているのだろうか。近年、戦後和解の成功例としてもはやされる傾向にある日英和解を媒介に、謝罪とは

何か、和解とは何かを考えようとするのが、本書の試みである。

オーラルヒストリーとメディア表象論を専門とする私は、元捕虜を主とした対象に、オーラルヒストリーを一年にわたって続け、真摯に元捕虜や元抑留民間人の声に耳をかたむけようとしてきた。そして、彼らのトラウマとともに、和解をめぐる政治プロセスを目の当たりにしてきた。

元捕虜の声は、日本で提示される口当たりのいい「和解成功」のせつかくの美酒を覆ってしまう。本書では、和解の物語によく出てくる元捕虜や兵士の残したオーラルヒストリーの記録などを提示し、また当時の新聞メディアの詳細な分析をもとに、日本向けに装われた「和解」の実態を明示する。

日本人はなぜ謝りつづけるのか〔目次〕

捕虜を知っていますか 戦後和解とは何だったのか

序章

英国の「戦争の記憶」

在郷軍人の怒り 何を追憶するのか 何を許すのか 荒れる英国と高まる敵意
セネタフの慰霊祭 VJデイ狂詩曲 若い日本人へのちよつとした攻撃
VJデイに招かれざる日本人

第一章 捕虜問題の基礎知識

捕虜問題とは

1 日本にとつての〈捕虜〉

「生きて虜囚の辱めを受けず」 日本軍はジュネーブ条約を尊重していたのか
「裏切られた」英国兵たち 元捕虜が受けた〈傷〉
「日本人は残酷だった」 捕虜たちの疑問

2

捕虜問題と経済摩擦

経済侵略への恐怖 拒否された慰霊式典

3

捕虜問題が現在に及ぼす影響

日本人の残酷イメージと捕虜問題 原爆使用の正当化と捕虜問題
捕虜抹殺命令書が存在

4

捕虜たちの抗議活動

なぜ補償を求めるのか 謝罪と補償を求めて

5

外務省の和解活動

外務省の対応：「平和友好交流計画」 お詫びへの道

第二章 「謝罪」と「お詫び」

村山首相のお詫び 〈謝罪〉と〈お詫び〉の違い 橋本首相のお詫び
誰に対するお詫びなのか 林大使の見解 サン紙の「オワビ」で、心に届くのか
サン紙掲載に対する日本の評価 「オワビ」の背後に何が見えるか

内向けの顔と外向けの顔 メディアが無効化する「オウビ」
サン紙のメディア工作 決して届かない「お詫び」 橋本首相の真意
ルパート・マードックとブレア 謝罪にこだわる捕虜の心情 本当に必要な言葉とは
正式な「謝罪」をなぜ求めるのか 効果はあったのか
なぜ天皇の言葉を求めたのか 次世代の責任
ガーター勲章に対する違和感 デモ当り
天皇の言葉に対する反応 アメリカでの「お詫び」はなぜ伝わらなかったのか
中国における「おわび」と謝罪

第三章 「民間和解外交」の功罪

119

民間人による和解外交活動 和解活動①恵子ホームス氏
「信仰」と「政治」のはざままで 恵子ホームス氏の活動の背後にあるもの
捕虜が抱く不信感 なのための日本旅行だったのか
癒しと和解の大成功例なのか?——ニック・カーターの経験
日本人を受け入れた元捕虜 「神は使われ、誤用されている」
キリスト教による和解の効果と疑問点 消える責任主体
ドイツとは異なる構図 和解活動②BCFG
階級制という限界 正しい戦争か植民地を巡る攻防か

対等な和解へ 和解活動③和解の森 植樹場所と捕虜記念碑の距離
和解活動④小菅氏のひざまずき 感動と怒りと
ひざまずきと東洋女性 プラント首相のひざまずき
ひざまずきとお詫びの言葉——ドイツ・モデルに沿って 「民間和解外交」の功罪

第四章 日の丸を焼いたジャック・カプラン

173

ジャックに対する英国内の反応
抗議から和解のシンボル・平和のヒーローへの「転向」
日本で表象されるジャック ジャックの「遺言」
政治家の責任 永瀬隆氏との出会い 杉原千畝との出会い
「しかし」がある 親日派になったのか 三つの和解

第五章 日本が謝れない四つの理由

195

「和解成功」がもたらしたギャップ 「お詫び」への拒絶感
良い帝国、悪い帝国 植民地への反省 ブレア首相の「お詫び」路線

日本軍への不信任 植民地を巡る亀裂

日中戦争と世界大戦——戦争の枠組みの違い BC級戦犯問題

「死んでお詫び」は通じない BC級戦犯裁判のやり直しを

『アロン収容所』 JSPという問題 POWかJSPか

JSPの経験 シベリアの抑留者 こちらから伝えることの必要性

あとがき

229

ロンドン同時多発テロ イラク戦争と第二次世界大戦の重なるイメージ
戦争をしないこと 英国における捕虜団体の現況 いくつかの提案
イラク戦争とクロスする「和解」

参考文献

243

巻末資料

253